

想定した経営類型 ハウスもも(加温、無加温)

1. 技術体系の特徴

経営類型	家族労働力	品目・栽培型及び規模		経営・技術の特徴
もも ハウス40a (動噴防除体系) 経営耕地面積 自作地40a	人 2.0	もも(加温) もも(無加温) 合計	a 20 20 40	1.加温と無加温の組み合わせで、労力分散を図る 2.高所作業車の導入による作業の省力化 3.「日川白鳳」および「あかつき」が主体 4.自発休眠覚醒のための低温要求量が少ないオキナワ台の導入
経営目標	1 農業総収入 2 農業経営費 3 農業所得	8,726 千円 6,952 千円 1,774 千円	4 1日当たり農業所得 5 1人当たり年間労働時間	8,871 円 800 時間

2. 資本装備と減価償却費

	種類・規模	数量	型式・構造・能力	所有割合	取得価格	耐用年数	年間償却額
建物・施設	加温ハウス(連棟標準型AP) 【8,444千円/10a】	2	連棟標準型(暖房機97kw、換気扇込み)	1	16,889 千円	8	1,056 千円
	無加温ハウス(連棟標準型AP) 【6,083千円/10a】	2	連棟標準型(換気扇無し)	1	12,168	8	760
	作業収納舎66㎡	1	鉄骨組み	1	3,136	24	131
	計				32,193		1,947
農機具	高所作業車	1	3kw、床面高1990mm	1	518	7	37
	トラック(軽)	1	0.35t積み、4WD	1	872	4	109
	小型運搬車	1	2.2kw	1	163	4	20
	動噴	1	4.0MPa	1	199	7	14
	刈払い機	2	排気量20.9ml	1	88	7	6
計				1,840		187	

3-1. 技術体系(もも: 日川白鳳、加温)

(10a当たり人、時間)

作業の種類	栽培技術		作業体系				使用資材	技術の重要事項
	技術内容	作業時間	使用機械器具	組み作業人員	実作業時間	延べ作業時間		
間伐せん定	間伐整枝せん定	7月	運搬車 高所作業車	1	3	3		・計画的に縮間伐を行う。
	秋季せん定	9月		1	12	12		・樹勢の弱い樹は秋季せん定は行わない。 ・整枝を主体に徒長枝の除去、下垂し過ぎた側枝の切り込みを行い、結果部位を主枝に近づける。 ・日焼けの発生に注意する。 ・切り口には、ゆ合剤を塗布する。
	冬季せん定	12月		1	18	18		・主枝垂主枝先端を切り返し、結果枝の適正配置に努める。 ・樹勢が強い樹は、結果枝を多めに残す。
土壌改良	堆肥、土壌改良資材施用	10月	運搬車	2	5.5	11	堆肥 2t 苦土入りカキガラ石灰 100kg	・土壌改良資材は土壌診断の結果に基づいて施用する。 ・施用後は土とかるくかき混ぜる。 ・2~3年に1回を目標に、樹間を部分的に中耕する。
草生管理	草刈り	3月 5月 6月	刈払機	1	6	6		・特に若木のうちは養水分の競合を避けるためにこまめに草刈りを行う。 ・除草剤の使用は夏草雑草発生期に留め、雑草草生による地力向上に努める。 ・使用薬剤、使用方法は県雑草防除基準による。
	除草剤散布	7月	動噴	2	2	4		
施肥	追肥 礼肥 基肥	2/下 6/上 11/下	運搬車	1	6	6	配合肥料 (N:10%)150kg	・年間の窒素施肥割合 追肥10% 礼肥20% 基肥70% ・徒長枝が多発する園では、施肥量を減らす。
防除	薬剤散布	1~12月	動噴	2	13	26	1回の散布量 300~500L	・特にせん孔細菌病、モモハモグリガ、ハダニ、アブラムシの発生に注意し、適期防除に努める。
摘らい	摘らい	開花前	高所作業車	1	10	10		・結果枝の上面や基部、花束状・短果枝、葉芽の無い枝のつぼみを主体に1/3~1/4程度を摘らいする。
人工授粉	ミツバチ放飼 毛ばたき受粉	3/上		1	8	8		ミツバチ 1箱 毛ばたき

3-1. 技術体系(もも: 日川白鳳、加温)

(10a当たり人、時間)

作業の種類	栽培技術		作業体系				使用資材	技術の重要事項
	技術内容	作業時間	使用機械器具	組み作業人員	実作業時間	延べ作業時間		
摘果	粗摘果	満開15~20日後	高所作業車	1	25	25		・色の濃い縦長の果実を最終着果量の1.5~2倍程度残す。 ・結果枝の中央から先端部の上向き果を残す。
	仕上げ摘果	満開30~45日後		1	19	19		・小玉果、片肉果、病害虫被害果、双胚果、突出果を主体に摘果し、適正着果量より20%多めに残す。
	修正摘果	満開60日以降		1	3	3		・主に核割れ果、病害虫被害果、奇形果、小玉果を摘果する。 ・適正着果量 長果枝: 30cm当たり1果残す。 中果枝: 1~2本に " 短果枝: 4~5本に " ・10a当たり12,000果程度着果させる。 ・幹周 20cm当たり90果/樹 30cm当たり216果/樹 40cm当たり360果/樹
反射マルチ被覆	被覆除去	5月		2	4	8	反射フィルム 4×100m	・着色期直前に樹冠下を被覆する。
収穫出荷	収穫調整出荷	5/下~6/上	トラック 高所作業車	2	45.5	91	化粧箱(1kg) 630箱 出荷箱(3kg:2コ入り10パック) 490セット フルーツキャップ 12,320枚	・地色の抜けぐあいをよく見て、早採りにならないよう注意する。 ・果実はいねいに取り扱い、傷みを出さないよう細心の注意を払う。
新梢管理	芽かき 捻枝 摘心 誘引	4~7月		1	40	40	誘引ひも 2巻	・主枝、垂主枝の背面から発生した芽は早めにかき取るが、部分的に弱い新梢を捻枝して残し、樹幹の日焼けを防ぐ。 ・過繁茂とならないよう、早めに新梢管理を行う。
フィルム等被覆管理	外フィルム被覆	1/下		4	8	32	外フィルム(0.1mm): 7.0×45m 4本 サイドフィルム(0.1mm): 2.7×42m 2本 内カーテン(0.075mm): 7.0×42m 8本 2.7×42m 2本 3年使用	・7.2℃以下の低温遭遇時間が800時間以上またはDVI1.0以上になってから被覆する。なお、オキナワ台の場合は700時間以上またはDVI0.9以上を目安に被覆する。 ・被覆期間中は地温を徐々に上昇させる。 ・開花期以降、内カーテンはできるだけ開放し、日照を確保する。 ・せん孔細菌病予防のため天井フィルムは梅雨明け後に除去する。
	内カーテン被覆			2	6	12		
	内カーテン除去	4/中		2	2	4		
	外フィルム除去	7/中		2	4	8		

3-1. 技術体系(もも:日川白鳳、加温)

(10a当たり人、時間)

作業の種類	栽培技術		作業体系				使用資材	技術の重要事項																					
	技術内容	作業時間	使用機械器具	組み作業人員	実作業時間	延べ作業時間																							
温度管理	保温加温換気	1～7月	暖房機換気扇谷、サイト換気装置	1	40	40	A重油3.6kl	<ul style="list-style-type: none"> ・夜温は加温開始5℃とし、徐々に上げて開花期には10～12℃、収穫期には15℃とする。 ・昼の高温は奇形果の原因となるので注意する。 ・温度管理の目安(℃) <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td></td> <td>夜温</td> <td>昼温</td> </tr> <tr> <td>加温～開花</td> <td>8</td> <td>20～22</td> </tr> <tr> <td>開花期</td> <td>10</td> <td>20</td> </tr> <tr> <td>第一次落果期</td> <td>12</td> <td>24</td> </tr> <tr> <td>第二次落果期</td> <td>12</td> <td>25</td> </tr> <tr> <td>硬核～着色期</td> <td>15</td> <td>25</td> </tr> <tr> <td>着色～収穫期</td> <td>—</td> <td>28</td> </tr> </table> 		夜温	昼温	加温～開花	8	20～22	開花期	10	20	第一次落果期	12	24	第二次落果期	12	25	硬核～着色期	15	25	着色～収穫期	—	28
	夜温	昼温																											
加温～開花	8	20～22																											
開花期	10	20																											
第一次落果期	12	24																											
第二次落果期	12	25																											
硬核～着色期	15	25																											
着色～収穫期	—	28																											
水管理	かん水	1～7月	かん水施設	1	13	13		<ul style="list-style-type: none"> ・加温前に十分灌水する。 50t/10a以上 ・加温～開花期: 5日間隔で15～20t ・開花時: 灌水をやや控える。 ・落弁～硬核期: 5日間隔で10～15t ・硬核期: 核割れや生理落果防止のため、過乾燥や過湿を避ける。 3日間隔で5～10t ・硬核期～着色初期: 十分灌水。 5日間隔で10～15t ・開花期は灰色かび病予防のためかん水を控えめとするが、乾燥しすぎると結実が悪くなるのでハウス内湿度60%を目安に管理する。 ・収穫2週間前以降はかん水を控えるが、過度な乾燥は渋果の原因となるので注意する。 																					
その他	道路・排水溝整備、災害対策等	1～12月		1	10	10																							
計						409																							

3-2. 技術体系(もも: 日川白鳳、無加温)

(10a当たり人、時間)

作業の種類	栽培技術		作業体系				使用資材	技術の重要事項
	技術内容	作業時間	使用機械器具	組み作業人員	実作業時間	延べ作業時間		
間伐せん定	間伐 整枝 せん定	7月	運搬車 高所作業車	1	3	3		・計画的に縮間伐を行う。
	秋季せん定	9月		1	12	12		・樹勢の弱い樹は秋季せん定は行わない。 ・整枝を主体に徒長枝の除去、下垂し過ぎた側枝の切り込みを行い、結果部位を主枝に近づける。 ・日焼けの発生に注意する。 ・切り口には、ゆ合剤を塗布する。
	冬季せん定	12月		1	18	18		・主枝亜主枝先端を切り返し、結果枝の適正配置に努める。 ・樹勢が強い樹は、結果枝を多めに残す。
土壤改良	堆肥、 土壤改良資材 施用	10月	運搬車	2	5.5	11	堆肥 2t 苦土入りカキ ガラ石灰 100kg	・土壤改良資材は土壤診断の結果に基づいて施用する。 ・2~3年に一回を目標に、樹間を部分的に中耕する。
草生管理	草刈り	4月 5月 6月	刈払機	1	6	6		・特に若木のうちは養水分の競合を避けるためにこまめに草刈りを行う。 ・除草剤の使用は夏草雑草発生期に留め、雑草草生による地力向上に努める。 ・使用薬剤、使用方法は県雑草防除基準による。
	除草剤 散布	7月	動噴	2	2	4		
施肥	追肥 礼肥 基肥	3/上 7/上 11/下	運搬車	1	6	6	配合肥料 (N:10%)150kg	・年間の窒素施肥割合 追肥10% 礼肥20% 基肥70% ・徒長枝が多発する園では、施肥量を減らす。
防除	薬剤散布	2~ 12月	動噴	2	12	24	1回の散布量 300~500L	・特にせん孔細菌病、モモハモグリガ、ハダニ、アブラムシの発生に注意し、適期防除に努める。
摘らい	摘らい	開花 前	高所作業車	1	16	16		・結果枝の上面や基部、花束状・短果枝、葉芽の無い枝のつぼみを主体に1/3~1/4程度を摘らいする。
人工授粉	ミツバチ 放飼 毛ばたき 受粉	3/下		1	8	8	ミツバチ 1箱 毛ばたき	・2~3分咲きの時に搬入する。 ・低温でミツバチの活動が鈍いときは毛ばたきで受粉する。

3-2. 技術体系(もも: 日川白鳳、無加温)

(10a当たり人、時間)

作業の種類	栽培技術		作業体系				使用資材	技術の重要事項
	技術内容	作業時間	使用機械器具	組み作業人員	実作業時間	延べ作業時間		
摘果	粗摘果	満開15~20日後	高所作業車	1	25	25		・色の濃い縦長の果実を最終着果量の1.5~2倍程度残す。 ・結果枝の中央から先端部の上向き果を残す。
	仕上げ摘果	満開30~45日後		1	19	19		・小玉果、片肉果、病害虫被害果、双胚果、突出果を主体に摘果し、適正着果量より20%多めに残す。
	修正摘果	満開60日以降		1	3	3		・主に核割れ果、病害虫被害果、奇形果、小玉果を摘果する。 ・適正着果量 長果枝: 30cm当たり1果残す。 中果枝: 1~2本に // 短果枝: 4~5本に // ・10a当たり12,000果程度着果させる。 ・幹周 20cm当たり90果/樹 30cm当たり216果/樹 40cm当たり360果/樹
反射マルチ被覆	被覆除去	6月		2	4	8	反射フィルム 4×100m	・着色期直前に樹冠下を被覆する。
収穫出荷	収穫調整出荷	6/中~下	トラック 高所作業車	2	48	96	出荷箱(3kg: 2コ入り10パック) 700セット フルーツキャップ 14,000枚	・地色の抜けぐあいをよく見て、早採りにならないよう注意する。 ・果実はていねいに取り扱い、傷みを出さないよう細心の注意を払う。
新梢管理	芽かき 捻枝 摘心 誘引	4~7月		1	40	40	誘引ひも 2巻	・主枝、亜主枝の背面から発生した芽は早めにかき取るが、部分的に弱い新梢を捻枝して残し、樹幹の日焼けを防ぐ。 ・過繁茂とならないよう、早めに新梢管理を行う。
フィルム等被覆管理	外フィルム被覆	2/中		4	8	32	外フィルム(0.1mm): 7.0×45m 4本 サイドフィルム(0.1mm): 2.7×42m 2本	・7.2℃以下の低温遭遇時間が800時間以上またはDVI1.0以上で、寒害のおそれなくなる2月中~下旬に被覆する。なお、オキナワ台の場合は700時間以上またはDVI0.9以上を目安に被覆する。
	外フィルム除去	7/下		2	4	8		・天井フィルムは梅雨明け後に除去する。

3-2. 技術体系(もも: 日川白鳳、無加温)

(10a当たり人、時間)

作業の種類	栽培技術		作業体系				使用資材	技術の重要事項
	技術内容	作業時間	使用機械器具	組み作業人員	実作業時間	延べ作業時間		
温度管理	保温換気	2～7月	谷、サト換気装置	1	34	34		<ul style="list-style-type: none"> ・昼温は20～22℃を目標に換気し、夜は出来るだけ保温に努める。 ・開花期に-2℃以下の低温に30分以上遭遇すると寒害のおそれがあるので、ストーブなどで臨時暖房する。 ・日中の高温に注意する。
水管理	かん水	2～7月	かん水施設	1	12	12		<ul style="list-style-type: none"> ・加温前に十分灌水する。 50t/10a以上 ・加温～開花期: 5日間隔で15～20t ・開花期時: 灌水をやや控える。 ・落弁～硬核期: 5日間隔で10～15t ・硬核期: 核割れや生理落果防止のため、過乾燥や過湿を避ける。 3日間隔で5～10t ・硬核期～着色初期: 十分灌水。 5日間隔で10～15t ・開花期は灰色かび病予防のためかん水を控えめとするが、乾燥しすぎると結実が悪くなるのでハウス内湿度60%を目安に管理する。 ・収穫2週間前以降はかん水を控えるが、過度な乾燥は渋果の原因となるので注意する。
その他	道路・排水溝整備、災害対策等	1～12月		1	10	10		
計						395		

4. 品目の作付体系

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
もも(加温)	∩⇒	※↑ 摘蕾 施肥	摘果	新梢管理		◆◆◆◆ 施肥	U			秋せん定	土壤改良	施肥	冬せん定
もも(無加温)		∩	※↑ 摘蕾 施肥	摘果	新梢管理	◆◆◆◆	U			秋せん定	土壤改良	施肥	冬せん定

注) 生育ステージ記号 ↑: 発芽 ※: 開花 ■: 収穫 ◆: 出荷 ∩ U: ビニール被覆・除去 ⇒: 加温開始

